

## 『摩訶止観』破法遍に見る菩薩思想

研究員 関口 中道

『摩訶止観』の破法遍は、周知のように豎・横・横豎不二の三つにより構成されている。

智顛は、「破法は経に説かれる文字（教）・観行（観）・智恵（智）・理などの諸門によってなされる」と説明するが、そのうちの無生門（教門に属する）によって破法を行うのが豎の破法遍である。また、無生門のみならず、その他の諸々の門を経て破法を行うのが横の破法遍であり、豎や横、諸門の区別をつけずに行うのが横豎不二の破法遍である。

この破法遍において、最も顕著に菩薩思想が説かれるのは、豎のうちの従空入仮の破法遍である。豎の破法遍は従仮入空・従空入仮・中道正観の三つで構成されるが、従空入仮の破法遍は、従仮入空により空を体得（自行）した菩薩が、化他行に赴くために行う破法である。従空入仮を觀する菩薩はしばしば入仮の菩薩、出仮の菩薩という言葉で表現されている。

入仮の菩薩は、従空入仮の破法遍を体得した菩薩を指す。それには慈悲心・本誓願・智恵猛利・善巧方便・大精進力の五つの因縁が必要だとされている。例えば、ここでいう（慈悲心を、湛然は「自体の（自と他の惑は自体であると觀する）慈悲」と説明している。自体の慈悲をもち、誓願を

立て、智恵、方便を用いて、数限りない衆生のために絶えず精進することが必要であるということである。<sup>3)</sup>

それを具現する方法として智顛は、菩薩の四事・四法をあげている。四事・四法についての説明は、『摩訶止観』の四種三昧の説明、『般舟三昧経』、『婆沙論』において見られる。四種三昧のうち常行三昧の説明には「三月の間、世間の相慾を念じない」、「善師に従事する」などの具体的な方法が説明されているが、これらは『般舟三昧経』などに「菩薩は四事の法ありて疾くこの三昧を速得す。何らをか四と為す。一つには所信、能く壞する者あることなし。二つに精進、能く速う者あることなし。三つには所入の知恵、能く及ぶものあること無し。四つには常に善師に従事す」とあり、四事の法の一として数えられているのである。破法遍の菩薩思想をより具体的にするには、これらより詳細にする必要がある。

(1) 『摩訶止観』(大正四六・五九中く六二上)

(2) 『止観輔行』(大正四六・三四〇上)

(3) 『摩訶止観』(大正四六・七五下)

(4) 『同』(大正四六・七六上)

(5) 『同』(大正四六・一二中)

(6) 『般舟三昧経』(大正三三・九〇六上、また『婆沙論』(大正三六・八六下)など。